

大学史ニュース

第25号

2023年7月31日 発行

目次	
◇第2代校長松岡康毅について…………… 2	◇輿水季吉宛の書簡…………… 6
◇本多康直・山田顕義等に関する滋賀県調査…………… 4	◇戦没軍属の資料調査…………… 6
◇『普通文官養成講義録』について …… 5	◇岩手県一関市千厩の永澤滋像…………… 7



北原白秋直筆の応援歌「戦機は熟す」

昨年、本学の応援歌のうちの一つである「戦機は熟す」（昭和6年5月制定）を作词した詩人・北原白秋の直筆原稿2点を入手しました。

白秋による応援歌の原稿は2点あり、いずれも「文房堂製」の原稿用紙に書かれています。原稿のうち1点は後半4行の歌詞が異なることから未定稿（写真左）、もう1点はほぼ現行の歌詞であり「四月二十二日完成」と記されていることから完成稿（写真右）として書かれたものと推定されます。戦前に作られた校歌・応援歌の原本は本学に残っていないため、非常に貴重な資料と言えるでしょう。

なおこの歌の作曲は、昭和4（1929）年5月制定で現在も歌われている本学校歌の作曲者・山田耕筈が担当しました。

応援歌「戦機は熟す」は制定翌年の昭和7年7月に開催されたロサンゼルスオリンピック歓送会などで歌われ、本学の学生たちを大いに奮起させました。

（上野平）



ロサンゼルスオリンピック歓送会

第2代校長松岡康毅について —没後100年を迎えて—

令和5（2023）年は、関東大震災発生からちょうど100年となります。明治26（1893）年、廃校の危機を迎えていた日本法律学校の第2代校長に就任し、その後30年間、校長・学長・総長として本学の発展に寄与した松岡康毅（1846-1923）は、関東大震災で被災し死去しました。よって、本年は松岡康毅没後100年にあたります。この節目の年に、今一度、松岡康毅について振り返りたいと思います。

松岡康毅は、現在の徳島県板野郡上板町に生まれ、明治4年に司法省に出仕しました。その後、東京裁判所所長、司法大書記官を経て明治19年、裁判実務調査のため欧州を視察しました。このとき、ドイツに留学していたのが、のちに日本法律学校創立者となる宮崎道三郎たちでした。東京控訴院長、検事総長を歴任した後、明治26年、日本法律学校第2代校長に就任。翌27年には内務次官となり、明治39年、第一次西園寺内閣で農商務大臣となりました。大正9（1920）年、日本大学は大学令による認可を受け、11年に総長に就任します。大正12年9月、葉山の別邸で関東大震災のため死去しました。

本学130年の歩みのうち、30年間も学校経営にあたった松岡康毅の本学への功績は、決して小さいものではありません。しかし、康毅の事績については、伝記である『松岡康毅伝』に頼るところが多く、不明な点も多くあります。今回は松岡康毅の出生から司法省出仕までの期間について取り上げていきましょう。

まず、康毅の読み方ですが、一般の辞書には「やすたけ」と記載されていますが、本学では「やすこわ」と呼称しています。これには理由があって、昭和58（1983）年、広報課発行の『桜門春秋』冬号に松岡康毅の令孫である康光氏（元本学生産工学部教授）を招いた座談会が掲載されています。康光氏は関東大震災のときに中学2年生で、生前の祖父康毅を良く知っており、この康光氏が『やすたけ』と人さんはおっしゃるけれど、あれは犬養毅（こわし）の『毅』ですから、本当は『やすこわ』なのです」と語っています。この令孫のご発言もあり、本学では「やすこわ」と表記しています。ちなみに、国立公文書館所蔵の「枢密院高等官転免履歴書（大正ノ二）」に松岡康毅が記載されていますが、姓名欄には「ヤスコワ」というルビが付されています。

次に出自です。松岡康毅は板野郡七条村（現上板町）の農家佐左衛門康吉の四男として誕生しました。父康吉は松岡家の養子として入りましたが、この松岡家は農耕の傍ら砂糖（和三盆糖）を製造していました。上板町は藍や砂糖の生産が盛んな地域で、松岡家も中程度の農家でした。康毅は六人兄弟の四男で、長兄は実家を継ぎ、次兄は商家の養子、三兄は江戸に剣術修業に出ていました。康毅は13歳のとき、現徳島市福島の中老長谷川家邸宅に寄寓し、学問所素読方の米本徳次郎（観翁）から教えを受けました。松岡家の先祖は、蜂須賀家が尾張にいた時代から長谷川家の家臣で、蜂須賀家の阿波国転封とともに七条村に移住して帰農しました。明治初年の記録では、七条村に長谷川家の知行地は確認できませんが、康毅は先祖からの繋がりを頼って、長谷川家に寄寓したのでしょうか。



松岡康毅（明治18年）

その後、康毅は16歳のときに江戸で若山^{ふつどう}忽堂に学び、その後、大坂の藤澤東^{かいなんがく}咳、南岳に学びます。藤澤東咳の塾は泊園塾（のちに泊園書院）と称し、幕末期は懐徳堂や適塾をしのぐ大坂最大の私塾でした。この塾で学んでいたときの交流が、後に明治政府への出仕へと繋がったのかもしれませんが。

戊辰戦争が始まった慶應4（1868、明治元）年4月、郷土の父、長兄が相次いで亡くなり、康毅は三兄康孝とともに七条村へ帰りました。翌年、藩主に上呈した政治上の意見書が認められ、明治3年1月に徳島藩の文学復読方に任ぜられました。同年5月、徳島藩家老稲田家の分藩独立に対して本藩の藩士が襲撃するという庚午事変（稲田騒動）が発生しました。明治政府は小室^{しのぶ}信夫を徳島藩大参事として派遣しますが、このとき、康毅は公務方応接役を兼務しました。以後、小室と康毅は深いつながりを持ち、明治5年、康毅は小室の親戚の長女光子と結婚しています。

明治4年7月廃藩置県が断行され、康毅は発足したばかりの司法省に出仕します。同時期、小室信夫と旧徳島藩主蜂須賀茂韶^{もちあき}は左院の少議官となっていますので、康毅の司法省出仕と何らかの関係がありそうですが、詳細はわかりません。これ以降、康毅は検事総長を辞任する明治25年まで司法省で働くこととなります。この司法省出仕当初の兄康孝の書簡が、現在、徳島県立文書館に保管されています。康孝は徳島藩土渡辺家の娘と結婚しますが、同家にたびたび近況報告を送っています。明治5年10月頃の書簡では、康毅が司法省七等出仕、康孝も司法省勤務となったことが記されていますが、令孫康光氏によると、康毅はこの時期から三崎町に居住していたといえます。つまり、本学初の校舎を建設した三崎町という地は、第2代校長松岡康毅が明治初年から居住していた土地でした。康毅が校長とならなければ、本学最初の校舎は三崎町以外の地に建てられていたかもしれません。ちなみに松岡家が所有していた三崎町の土地は、昭和3（1928）年、日本大学が取得して校舎を建設しました（現経済学部本館所在地）。

本学の建学の精神を考える上で、創立期の事象はとても重要です。しかし、本学苦難の時代を30年にわたり牽引し続けた松岡康毅の事績も、併せて検証していくことが必要であると、没後100年を迎えて改めて感じます。引き続き、松岡康毅関係資料の情報収集を進めていきたいと思えます。

（松原）



明治5年頃の司法省関係者（前列中央江藤新平、後列左から3人目が松岡康毅） 佐賀県立佐賀城本丸歴史館蔵

日本大学創立六十周年記念水上競技大会メダル

令和5（2023）年3月、スポーツ科学部の上野広治教授より、橋爪四郎氏（1928～2023）旧蔵の「日本大学創立六十周年記念水上競技大会」のメダルを寄贈いただきました。

橋爪氏は和歌山県出身で、すでに本学水泳部員として活躍していた古橋廣之進の誘いを受けて昭和22（1947）年に専門部農業経済科に入学、昭和24年に法学部政治経済科（新制）に進学、昭和26年に卒業しました。昭和24年に戦後初めて日本人の参加が認められた国際的なスポーツ大会である全米水上選手権大会に出場し、1500m自由形で古橋と共に世界新記録を出し、世界中を驚かせました。のちに昭和27年のヘルシンキ五輪では同競技で銀メダルを獲得します。

今回寄贈いただいたメダルは、橋爪氏らが全米水上選手権から帰国して間もない昭和24年10月7日に神宮プールで開かれた本学60周年記念の水泳大会に際して作成されたものです。同大会で橋爪氏は模範競技を披露したほか、スターター等を務めました。

貴重な資料をご寄贈くださいました上野教授に記して感謝申し上げるとともに、本年3月9日に永眠された橋爪氏のご冥福をお祈りいたします。

（上野平）



日本大学創立六十周年記念水上競技大会メダル

本多康直・山田顕義等に関する滋賀県調査

令和5（2023）年2月、本学創立者の一人である本多康直について、ゆかりの地である滋賀県大津市で調査を行いました。

本多康直は伊勢^{かんべ}神戸藩（現在の三重県鈴鹿市）の藩主・本多忠寛^{ただかど}（忠廉）の次男で、のちに膳所藩^{ぜぜ}（現在の滋賀県大津市）最後の藩主（第14代）・本多康稷^{やすしげ}の養子となりました。明治7年にドイツに留学し、ゲッティンゲン大学で日本人として初めてドクトルユリスの学位を取得した後、明治18年に帰国。帰国後は司法省に勤務し、民事訴訟法の起草等に携わります。明治22年に日本法律学校の創立に関わり、自らも法案成立に関わった民事訴訟法の講義を担当しました。

今回は、滋賀県立図書館、大津市立図書館で膳所藩に関する資料の調査を行ったほか、本多家中興の祖の四柱を祭神とする神社である本多神社を訪問し、宮司の本多啓一郎氏より、本多康直が養子に入った膳所本多家と生家の神戸本多家の関係等、貴重なお話を伺いました。なお、啓一郎氏は第12代藩主^{やすつぐ}康禎の息子・最後の膳所藩主の康稷の弟である豊七郎のご子孫にあたる方で、現在、本多家ゆかりの品々を展示している膳所藩資料館を管理・運営しておられます。調査の折には資料館を見学させていただきました。当課では、今後も本多康直に関する調査を継続的に行ってまいります。



本多神社（滋賀県大津市）



膳所藩資料館（本多神社内）

滋賀県立公文書館では、学祖山田顕義についての調査を実施しました。学祖は明治24（1891）年の大津事件の折に司法大臣を務めていました。滋賀県立公文書館では、大津事件に際して学祖が出した電報等の調査を行いました。

併せて、近江八幡市にて、旧主婦の友社ビルの設計者であるW.M. ヴォーリズに関する資料の調査と、同市内に現存するヴォーリズ建築の踏査調査を行いました。

調査に際しご協力くださった皆様に、記して御礼申し上げます。

（上野平）



大津事件現場（滋賀県大津市）



大津事件に際し山田が出した電報写
（明-か-244「貴賓来県（外国皇族）
（大津事件）」滋賀県公文書館所蔵）

【参考文献】

『日本大学百年史 第一巻』（日本大学、平成9年）
「華族系譜195 本多家 膳所・神戸・西端・飯山」（宮内庁宮内公文書館所蔵）

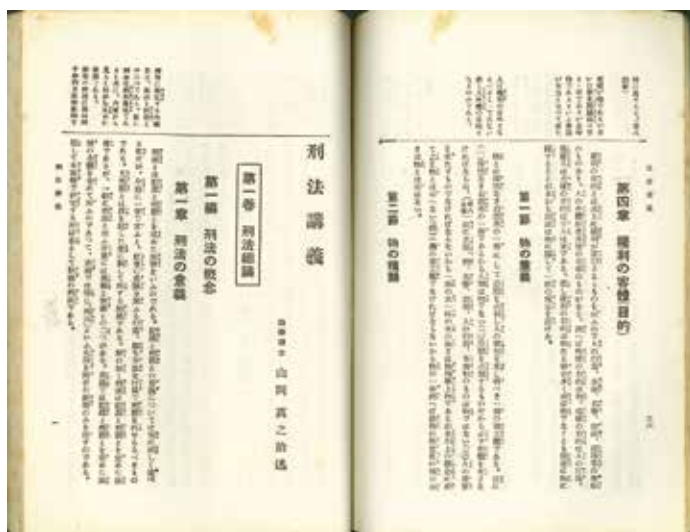
『普通文官養成講義録』について



令和5（2023）年4月、加藤直人前理事長・学長より、昭和6（1931）年に発行された『普通文官養成講義録 第一号』ほか4点をご寄贈いただきました。主に、文官普通試験・裁判所書記登用試験の合格を念頭に作成され、通信教育の教材として用いられた講義録です。大きさは菊判（22cm×15cm）で、毎号約240ページの中に平均6科目分の講義が収録されています。入会金の50銭と毎月95銭の会費を支払うと、本講義録と機関雑誌である『法制』がセットで送付されました（当時の新聞1ヶ月分が約90銭）。

『普通文官養成講義録』を出版していた日本大学法制学会は、大正2（1913）年3月に通信教育界の草分けとして、澤野民治（日本大学高等師範部卒）、山岡萬之助（のちの日本大学第3代総長）、石渡敏一（日本大学理事）らにより創設されました。その活動目的は、法律の知識を広く普及させること、そして、向学心をもちながらも経済的に恵まれない地方の青少年に勉学の機会を与えることでした。

本講義録は、そうした目的の第一歩として作成・発行されました。先述したように、文官普通試験・裁判所書記登用試験合格を念頭に作成されたのも、試験に比較的合格しやすい上に就職口が多く、安定した給与と時間を確保できる職にまず就き、働くかたわら更なる勉学に励んでもらおうという考えからでした。また、誰にとっても理解しやすい講義録にするため、それまでは文語体で書かれていて難解だった法律用語を、平易な口語体で記述しました。その他にも、十分な学習効果が得られるように全ての漢字にふりがなを振り、ページ上部に注釈をつけるなど、様々な工夫がなされています。



日本大学法制学会は、国家試験の受験資格改正や合格実績などの影響により会員が増加したことから、大正15（1926）年に日本大学から独立、名称を日本通信大学法制学会へと変更しました。そのため、今回寄贈いただいた昭和6年時点での出版元は「日本大学法制学会改称 日本通信大学法制学会出版部」となっています。

改称後も会員・会友は増加し続け、昭和3年頃には約3万人に達し、北海道利尻島から九州、さらには中国・韓国・台湾など広範囲に及びました。講義録の刊行は、戦況の厳しさにより休止される昭和19（1944）年まで続き、様々な環境の中で勉学にはげむ多くの青少年を後押ししました。ちなみに、今回ご寄贈いただいた講義録には多数の書き込みがあります。当時、立身出世を夢見て真摯に学んだ会員が使用したのかもしれませんが。

このたび、貴重な資料をご寄贈いただきました加藤直人前理事長・学長に心より御礼申し上げます。

（図子）

【参考文献】

『日本法制学会八十年史』（財団法人日本法制学会、平成5年）

日本大学の歴史「法律分野／独学者の慈父 澤野民治」 <https://www.nihon-u.ac.jp/history/forerunner/sawano/>

輿水季吉宛の書簡

令和4（2022）年12月、個人の収集家から、日本大学第二高等学校長などを務めた輿水季吉（1895～1969）宛の書簡など32点の寄贈を受けました。内訳は、輿水及び日本大学第二中学校（旧制）関係の書簡が28点、明治天皇の侍従長徳大寺実則（1840～1919）宛の書簡2点と同封筒（差出は乃木希典）のみ1点、その他1点です。年代は昭和20年までが26点、戦後3点、30年代3点です。



教頭時代の輿水（前列左から2人目）
「日本大学第二中学校卒業記念写真帖
（昭和17年）」

輿水宛書簡には実則の息子で建築家の徳大寺彬麿関係の書簡が4点あることから、輿水と徳大寺家とは、なんらかの交流があったことは確かですが、詳しい事情は明らかではありません。

輿水季吉は、昭和3（1928）年に日本大学高等師範部国語漢文科を卒業、設置されたばかりの第二中学校（旧制）の教諭となり、10年に教頭、29年に第二高等学校長、37年には同中学校長を兼任。日本第二学園設立の21年からは、理事・教務部長・常務理事を歴任しました。学外でも、杉並区教育委員を務める一方、保護司としても活動し、犯罪者の更生に永年貢献しています。

輿水・第二中学校関係の書簡の内16点には封筒に輿水直筆と思われる付箋が貼ってあり、差出人の名前と肩書・日付が記してあります。差出人は教育者・政治家・軍人・文化人など様々ですが、生徒の父兄としての礼状や中学校の教員採用に際しての推薦状などが含まれており、今後、分析を進める予定です。（高橋）

【参考文献】

『輿水季吉先生』（日本第二学園、昭和46年）



寄贈された書簡の一部

戦没軍属の資料調査

令和4（2022）年4月、『ある青春 田中正光1914-1944』が、共著者の一人田中真樹子氏から寄贈されました。田中正光は真樹子氏の大叔父で、法政大学工業学校から日本大学予科文科（夜間）へ進み、通信省電気局で測量技術者を勤めながら、昭和15年3月に法文学部文学科史学専攻（夜間）を卒業。同時期に、青年学校の教員に採用されましたが、17年9月、技術系の軍属として海軍に徴用されました。勤務先は横浜・横須賀の海軍施設で、19年3月には工長（下士官相当）となりましたが、直後にサイパン島に転属となり、7月の同島陥落時に戦死しています。

正光は、学生時代から俳句や小説などの創作活動をしており、予科生時代に書いた短編小説「日比谷附近」は雑誌『新潮』に掲載されています。寄贈された本は、そうした作品の遺稿集として刊行されました。

真樹子氏に問合せたところ、本に掲載されている資料や写真は、共著者の田中英光氏（正光の甥）が所蔵しているとのことで、英光氏に連絡を取り、令和5年5月、東京都北区の同氏宅を訪問しました。

資料は、英光氏により丁寧に内容別に分類されていました。多くは原稿類で、測量技術者の仕事の関係か旅日記など



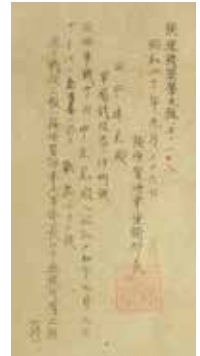
日本大学法文学部文学科史学専攻第9回
卒業生集合写真(正光は後列左から3人目)



海軍時代の正光（前列左から3人目）
生前最後の写真と思われる（昭和19年3
月26日撮影）

を綴っていたためか、あるいはその両方なのか、当時の日本各地の地図も残されていきました。日本大学に直接関係する資料は、予科修了証書・学部卒業証書・卒業時の史学専攻者集合写真（前頁掲載）の3点でしたが、それらを含めて、青年学校教員時代や出征関係の資料を27点、アルバム掲載の写真10点、合わせて37点を撮影しました。なかでも、戦後の戦没者遺族宛の文書類には、初めて目にした資料もありました。

一例を挙げますと、正光の戦死通知に関しては、横須賀海軍運輸部長名で出された内報（右写真、20年9月26日付）と、その8ヵ月以上後の横須賀地方復員局人事部長名の通知状（21年6月5日付）の2点が残っています。前者に関連した文書「戦没内報二関スル件通知」には、内報は戦没の事実を公表（戦没公報）に先立って伝えるものなので、戸籍抹消などの手続きは公表を待って行うように、給与は公表される月まで支払われるなど、戦没者遺族への対応の詳細が記されており、当時の状況を知る興味深い資料の一つといえます。



遺族宛の戦没の内報

本稿では、田中正光家で撮影した資料から、写真2点と戦没の内報の計3点を掲載しました。

（高橋）

岩手県一関市千厩の永澤滋像

本学理事長等を務めた永澤滋（1904～1989）は、岩手県一関市千厩出身の人物です。永澤家は、宿場町であった千厩の役人を近世期に代々担った家で、永澤が生まれた明治期には、父・武左衛門が千厩郵便局長を務めていました。

永澤は大正14（1925）年に創設された本学専門部医学科第1期生で、卒業後は医学科長の額田豊が経営していた額田病院に勤め、のち帝国女子医学薬学専門学校（現在の東邦大学。額田が理事長を務めた）講師、本学生理学教室助手などを経て永澤病院を開業しました。

終戦後、医学部は態勢を立て直すためにも昭和20年4月の空襲により焼失した板橋病院の病院復興を急務としていましたが、この時、永澤は第1期生として募金活動に奔走します。そして昭和25年に比企能達医学部長の誘いを受けて教授として再び本学に赴任、駿河台病院長に就任しました。理事、評議員、医学部長等を歴任し、昭和47年に本学理事長となります。

理事長就任翌年の昭和48年、永澤の学識と経験が高く評価され、千厩町初の名誉町民となりました。昭和51年には永澤から千厩町へ贈られた寄付金を基金として千厩町教育文化事業団が発足するなど、町の教育文化の発展を支援しました。

昭和60年10月、名誉町民である永澤の活躍を讃えて、千厩町役場に永澤滋像が設置されました。この像は、千厩町が一関市に合併した現在も一関市役所千厩支所の入り口に飾られ、故郷・千厩を見守り続けています。

この度、像の撮影、永澤滋に関する資料の調査にあたっては、一関市役所千厩支所並びに一関市立千厩図書館に多大なるご協力を賜りました。記して御礼申し上げます。

（上野平）

【参考文献】

永澤滋『随想七十年』（英潮社、昭和49年）、『千厩町史』第二巻近世1（千厩町、昭和61年）・第四巻近代編（千厩町、平成12年）・第五巻現代編（千厩町、平成17年）、『広報せんまや』No.208（昭和49年10月）・No.209（昭和49年11月）・No.220（昭和50年11月）



一関市役所千厩支所入口の永澤滋像

活動報告

令和5年1月～令和5年6月
(大学史に関する活動)

○調査・研究

1月26日	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・研究会に参加(国士舘大学)
2月6日	本多康直関係資料調査(国立国会図書館)
2月14日～16日	本多康直・山田顕義・ヴォーリズ関係資料調査(滋賀県大津市・近江八幡市)
2月22日	全史料協関東部会定例研究会に参加(オンライン)
3月10日	日本大学幼稚園関係資料調査(東京都公文書館)
3月11日	『東京経済大学百二十年史 資料編第二巻』刊行記念講演会に参加(東京経済大学)
3月16日	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・研究会に参加(法政大学)
4月25日	瀧口喜博関係資料調査(東京都：瀧口家)
4月27日	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会に参加(オンライン)
5月12日	学徒兵関係資料調査(東京都：田中家)
5月18日	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・総会に参加(明治大学)
5月23日	全史料協臨時総会に参加(オンライン)
5月26日	永澤滋関係資料調査(岩手県一関市)
5月31日～6月2日	松岡康毅及び秋田清関係資料調査(徳島県徳島市・上板町)
6月2日	全史料協関東部会総会・記念講演会に参加(東京都武蔵野市)
6月12日	箱根駅伝関係資料調査(神奈川県横須賀市：渡辺家)
6月29日～30日	三島校舎等関係資料調査(静岡県静岡市)

○展示

1月13日～3月31日	昭和初期の学生生活
4月1日～6月30日	日本大学学徒の出征－学徒出陣壮行式から80年－

○研修・講演

2月～3月	本部SD研修動画「地域と大学」製作・配信
5月11日	スポーツ科学部 大学史講演

令和5(2023)年7月1日より、部署名が「広報部広報課」に変更となりました。

日本大学大学史ニュース

第25号

2023年7月31日 発行

編集・発行 日本大学広報部広報課
〒102-8275 東京都千代田区九段南4-8-24
TEL 03-5275-8444 FAX 03-5275-8094

印刷 フジサービス株式会社